

漢語近世音と契丹文字漢字音(6)

—契丹小字の入声表記、烈・律の韻尾の有無—

吉池孝一 中村雅之

前回

中村：前は烏拉熙春(2006)の検討をしました。烏拉熙春(2006)は、契丹大字と契丹小字で表記された資料を基に、業十立臘に-p 韻尾を、筆に-l 韻尾を認めるというものでした。烏拉熙春氏は結果のみを記し、論証はおこないませんが、われわれの検討による限り、決定的な否定材料はありませんでした。少なくとも「十」に関しては契丹小字の検討によって入声韻尾-p を認めることができそうです。

吉池：『皇極經世聲音唱和圖』（作製年代は1011-1077年）の漢人の洛陽音の状況は、入声韻尾-k と-t は消失しており、-p のみ認められるというものでした。契丹大字と契丹小字による遼代の漢語入声韻尾の状況は『皇極經世聲音唱和圖』と同様であり、『中原音韻』とは異なるようにみえます。

今回は呉英喆(2007)、呉英喆(2011)<sup>1</sup>を検討するということでしたが、呉氏論文の一部について前回既に言及しましたね。

中村：前回、呉英喆(2007)と呉英喆(2011)中に入声韻尾について二つ言及しました。一つ目は、烏拉熙春(2006)は𠵹𠵹をjib とし十の漢字音としたわけですが、呉英喆(2011)も同じ例により入声韻尾-p を想定するので既に前回に紹介しました。

吉池：二つ目は、烏拉熙春(2006)は𠵹𠵹𠵹 lab を臘の漢字音とするわけですが根拠は明示しません。ほぼ同じ時期に、呉英喆(2007)も同じ例により臘に入声韻尾-p のあることを論証しているのでそれについても紹介しました<sup>2</sup>。今回は「臘」𠵹𠵹𠵹 lab と「十」𠵹𠵹 jib の二例を除いて、呉英喆(2007)と呉英喆(2011)によって入声韻尾が認められるとする例について検討しましょう。

<sup>1</sup> 呉英喆(2007)「契丹文中之漢語入声韻尾的痕跡」『漢字文化』2007(3)、26-29,64頁。呉英喆(2011)「再論契丹文中之漢語入声韻尾的痕跡」『北方文化研究』2(1)、85-90頁。

<sup>2</sup> 「契丹小字《蕭特每・闊哥駙馬之第二夫人韓氏墓誌銘》第34行有：𠵹𠵹𠵹-及子列-𠵹𠵹𠵹-𠵹-丁-屯。劉鳳翥先生將這些字釋作“掩閉臘月廿四”。前二字常見於其他資料，釋作“掩閉”，應能成立。因此，第三字𠵹𠵹𠵹是第四字𠵹（月）的定語是很明顯的。劉鳳翥先生釋作“臘月”是有道理的。末二字表示“廿四”，學界早已釋出。組成契丹字𠵹𠵹𠵹的三個原字的讀音分別為：𠵹讀 [l] 或 [la]，𠵹讀 [a]，𠵹字讀 [pu]。對𠵹的讀音需要做一些說明：王弘力先生將𠵹𠵹𠵹𠵹讀為 tobogji “撻不也”，釋讀𠵹𠵹𠵹𠵹為 ʃobog~ʃubug “阻卜”，“術不姑”，《遼史》多見此名。𠵹𠵹𠵹𠵹為“阻卜”之賓格。」(27頁)

まずは呉英喆(2007)ですね。呉氏は契丹語名に付された迪烈および耶律という訳語によって、入声韻尾-tを認めます。

### 訳語の質

中村：これまでは漢字音が契丹文字でどのように表記されるかという観点から、遼代の漢字音を検討してきました。呉英喆(2007)は漢字音の-t韻尾の存在を、契丹語の原語にたいする漢字訳語を用いて論じようとするわけですね。訳語を用いて、訳語が使われていた時の音を論ずることは慎重でなければなりません。遼代に迪烈および耶律が使われていたとしても、それによって直ちに漢字音を議論することはできません。

吉池：迪烈および耶律の烈と律が、原音の d に相当しているからといって、烈や律に l-t という音を認めることはできないということですね。

中村：訳語が何時できたかが重要です。いったんできた訳語は固定する傾向にありますから、訳語によって議論することができる漢字音は、訳語が作られた時の漢字音、もしくは訳語に変更があった時の漢字音です。その点に注意して議論を進めましょう。

### 迪烈の烈の韻尾

吉池：呉英喆(2007)は、耶律迪烈墓誌の第4行目にある𐰽𐰺 dolt が墓主である迪烈として、人名の l-t の部分に漢字「烈」を当て、烈に入声韻尾-tを認めます。この入声韻尾-tについて引用文を見ると「-t韻尾的痕跡」とするので、遼代の何らかの漢字音として入声韻尾-tを認めていることは確かです。その議論について次に引用します。ただし、耶律迪烈墓誌の第4行目の当該の語の第一原字は、拓本によると点のある𐰽𐰺なので、今後議論においては𐰽𐰺とします。

#### (二) -t韻尾的痕跡

契丹小字《耶律迪烈》第4行有𐰽𐰺，過去將其第二原字誤認爲公，後由包聯群博士指出第二原字應爲𐰽<sup>⑦</sup>，劉浦江教授在有關父子連名制的文章中對包氏更正表示贊同，認爲其正確的寫法是𐰽𐰺。並且說這對“烈”的正確譯音增添了一個有力的證據：“迪烈的烈，《廣韻》作良薛切，是以 t 音收尾的入聲字，故用以對譯帶有尾輔音 t 的𐰽𐰺一詞，實在是再合適不過了”<sup>⑧</sup>。“烈”的不同時期的讀音是：上古音 liät4，中古音 liēt4，近代音 lie4。據過去研究，原字𐰽讀 [dol]，原字𐰽讀 [t] 或 [tə]，𐰽𐰺讀 [dolt]。如果以“烈”的近代音 lie4 爲擬音依據，就很難與 [dolt] 這個讀音相吻合，依據“烈”的中古音 liēt4，問題纔能得到合理的解釋。契丹小字《耶律永寧郎君墓誌》第22行的𐰽𐰺𐰽-𐰽-𐰽𐰺，有的學者譯作“迪烈德太師”，其實，𐰽𐰺𐰽就是𐰽的分寫形式，根據“烈”的中古音 liēt4，亦可將𐰽𐰺譯作“迪烈”。雖然“迪烈”不是漢語借詞，但也可以看到表示入聲韻尾-t的痕跡。(27頁)

⑦包聯群《〈南瞻部洲大遼國故迪烈王墓誌文〉的補充考釋》，《內蒙古大學學報》2002年第3期。

⑧劉浦江、康鵬《契丹名、字初釋——文化人類學視野下的父子連名制》，《文史》2005年第3期。

中村：議論の前に、誤植らしきところを確認しましょう。下線を付した部分は文意がとおりません。

吉池：「**令田令就是𠂔的分寫形式**」は「**令田令就是𠂔令的分寫形式**」の誤植でしょう。

中村：𠂔令の第二の原字が令であるか公であるか問題となっているようです。字形として令としてよいかどうか、またそれに迪烈を当てることの是非について確認しましょう。

吉池：最初に耶律迪烈の第4行を𠂔公と翻字し、迪烈（当該墓誌の漢文誌蓋に迪烈王とある）をあてたのは盧迎紅・周峰(2000)<sup>3</sup>です。盧迎紅・周峰(2000)の“考釋”を受けて書かれた劉鳳翥(2014)の“再考釋”<sup>4</sup>も𠂔公としますが、いま当該部分を劉鳳翥(2014)<sup>5</sup>所収の拓本に拠って字形を確認すると次のとおりです。右側の原字の屋根の下は▽ですから、字形としては包聯群(2002)が指摘したように公ではなく令なのでしょう。



次に𠂔令に迪烈を当てることについて、𠂔令を含む前後を、劉鳳翥(2014)の模写を作業用のフォントに翻字し傍訳とともに示すと次のとおりです。なお劉鳳翥(2014)は𠂔公としますが、𠂔令に訂正して提示します。

#### 耶律迪烈墓誌

第4行目：令𠂔-九次-天化-𠂔令-來化当和-令本並出

相 公 諱 迪烈 第二個名 撒懶

【相公（墓主を指す）の諱は迪烈、字（第二の名）は撒懶】

この傍訳は、『遼史』卷96「耶律敵烈傳」に「耶律敵烈，字撒懶」とあることにより、敵烈と迪烈を同名異字とし、幼名を迪烈、第二の名（字）を撒懶としたものです。このような読みは、早くは愛新覺羅 烏拉熙春(2006)<sup>6</sup>にみえます。

<sup>3</sup> 盧迎紅・周峰(2000)「契丹小字《耶律迪烈墓誌銘》考釋」『民族語文』2000年第1期、43-52頁。劉鳳翥氏の考えを受け入れて書かれたもの。

<sup>4</sup> 劉鳳翥(2014)「契丹小字《耶律迪烈墓誌銘》再考釋」『契丹文字研究類編 第一冊～第四冊』北京：中華書局、143-152頁。

<sup>5</sup> 劉鳳翥(2014)『契丹文字研究類編 第一冊～第四冊』北京：中華書局の第四冊。

<sup>6</sup> 愛新覺羅 烏拉熙春(2006)『契丹文墓誌より見た遼史』京都：松香堂。140頁参照。

中村：𠵹令に迪烈をあてるとして、𠵹令を *dolt* と読むことについてはどうなのでしょう。

吉池：𠵹や𠵹は、早から数字「七」の意味とされています。『契丹小字研究』(1985)<sup>7</sup>は𠵹の音は明示しません。令については [t/t'] とします。𠵹の音は、早くは王弘力(1986)<sup>8</sup>が数字七を表わす𠵹を *dol* とし、蕭仲恭墓誌第 30 行の𠵹𠵹を人名 *dolgo* と読み漢訳の撻烈哥を当てました。*dol* は数字七を表わすモンゴル諸語によったものと思われます<sup>9</sup>。

中村：これらの研究に抛り𠵹令を *dolt* としたとして、モンゴル系の言語の語末に t を想定していいのでしょうか。

吉池：中期モンゴル語資料の一つであるパスパ文字モンゴル語では音節末や語末に無声有気音 t [tʰ] ([t] とするなどの立場もある<sup>10</sup>)は立ちません。Svantesson(2005; 2008)<sup>11</sup>は中期モンゴル語(Svantessonは*Old Mongolian*とする)の音節末子音に無声有気音 t [tʰ]は立たないと想定します。問題は契丹語ではどうかということです。武内康則(2015)<sup>12</sup>は『遼史』中の漢字音訳契丹語を集め、その語頭・語中にどのような音が出るかを調査したのですが、それによると語頭では [t-] と [tʰ-] の漢字は多用されるが、語中では [tʰ-] の漢字の使用は極めて少ないとのこと。漢字音訳契丹語では音節末や語末を表記する特別な方法がない<sup>13</sup>ので音節末や語末の状況はわからないのですが、『遼史』中の漢字音訳契丹語の語頭と語中における漢字使用の状況は参考になります。契丹語も中期モンゴル語と同様に、音節末や語末に [tʰ-] などの無声有気音は立たなかったと見てもいいのではないで

<sup>7</sup> 清格爾泰、劉鳳翥等著(1985)『契丹小字研究』北京：中国社会科学出版社。

<sup>8</sup> 王弘力(1986)「契丹小字墓誌研究」『民族語文』1986年第4期、56-70頁。陳乃雄・包聯群(2005)『契丹小字研究論文選編』呼和浩特：内蒙古人民出版社所収。

<sup>9</sup> 清格爾泰(2002)『契丹小字釋讀問題』東京外国語大学 A.A.研は𠵹の音の解説に 7 の意味をもつモンゴル諸語を挙げ𠵹を *dol* とする。蒙古文語 *doloyan*~*doluyan*、蒙古語口語 [dɔlɔ:]、土族語 [dolo:n]、達斡爾語 [dolo:]。なお、[d] とあるが実際の音声は無声無気音 [t] であろう。

<sup>10</sup> 契丹語の破裂音と破擦音がどのような音によって対立していたかという点について、三つの立場がある。[t] を例とすると、

① 強音と弱音の対立とする立場。強音は発音器官の緊張。音声としては主に [tʰ] など。弱音は発音器官の弛緩。音声としては [t~d] など。

② 清濁の対立とする立場。清音(無声音) [t] と濁音(有声音) [d]。

③ 気音の有無による対立とする立場。無声有気 [tʰ] と無声無気 [t]。無気音は、気音さえ無ければ良いので、前後の環境により [t] (無声) ~ [d] (半有聲) ~ [d] (有聲) という揺れ幅がある。

<sup>11</sup> Svantesson, J.-O. (2005; 2008) *The Phonology of Mongolian*. Oxford University Press, New York, paperback 2008: p.124-125.

<sup>12</sup> 武内康則(2015)「『遼史』中の音写漢字に反映された契丹語の音声と音韻」『内陸アジア言語の研究』XXX、1-27頁。

<sup>13</sup> 漢字音訳モンゴル語の『元朝秘史』では、音節末や語末の子音を“小さな漢字”で表記するという工夫がみられる。

ようか。

中村：明代に漢字モンゴル語に書き換えられた『元朝秘史』では音節末子音 d を表記するために無声有気音の“揚”<sup>ㄊ</sup>が小さな字で添えられますが、これによって音節末や語末に t ([<sup>ㄊ</sup>]) を立てるわけにはいきません。『元朝秘史』“揚”<sup>ㄊ</sup>が使用されたのは明代の何らかの事情を反映したものでしょうが、いまのところどのような事情によるものか分かりません。

我々は、<sup>ㄊ</sup>は dolt ではなく dold であるという立場で議論をすすめることにしましょう。dold と迪烈とを見比べて気になる点は母音が合わないことです。do にふさわしい漢字音は「多」「朶」「都」などいくらでもありそうです。なぜ近似音とは思えない迪（『中原音韻』では迪と同音の敵が ti とある<sup>14</sup>）で契丹語の do を音訳したのでしょうか。

吉池：愛新覚羅 烏拉熙春(2004)に興味深い解決策が見えます。<sup>ㄊ</sup>（<sup>ㄊ</sup>を含めていいのでしょうか）の“音読み”を dir とし、“訓読み”を dolo とします（17 頁）。なお、数字七の読みは『至元譯語』の漢字音訳モンゴル語の「朶朶」を参考としてあげます（71 頁）。<sup>ㄊ</sup>を数字の七を表わす表意文字と見なして dolo と訓読するわけです。

中村：音読みの dir の根拠は何でしょう。

吉池：先に挙げた烏拉熙春(2006)は興味深い指摘をします。人名の令田当が、同じ人名として別の墓誌で<sup>ㄊ</sup>当と書かれているとし、それにより<sup>ㄊ</sup>を令田とします<sup>15</sup>。令が d/t [t/<sup>ㄊ</sup>] であることは漢字音との対応により『契丹小字研究』（1985）以来認められているのですが、<sup>ㄊ</sup>の音は未解明でした。<sup>ㄊ</sup>の音を公表した早いものに即實(1996)があります。許王墓誌の<sup>ㄊ</sup>中を漢字音訳契丹語の夷離畢（『遼史・国語解』にある官名）にあて<sup>ㄊ</sup>を iri と読みました（658 頁）。清格爾泰(2010)<sup>16</sup>は、漢文「耶律宗教墓誌」の「十五年，拜左夷離畢」と契丹文「耶律宗教墓誌」第 14 行の「朶朶-朶化-<sup>ㄊ</sup>中」（東院夷離畢）の対応を確認し<sup>17</sup>、<sup>ㄊ</sup>中を夷離畢と読み、<sup>ㄊ</sup>を ir 或は il としました。

中村：<sup>ㄊ</sup>中と夷離畢の対応が正しいとしたならば、可能性として<sup>ㄊ</sup>は ir, iri, il, ili のいずれかであり、どれか一つに決定する根拠が示されない限り、<sup>ㄊ</sup>は dir~diri, dil~dili ということになりそうですね。

<sup>14</sup> 楊耐思(1981)『中原音韻音系』北京：中國社會科學出版社による。

<sup>15</sup> 「『<sup>ㄊ</sup>』の音価は「令田」と同じで、『撻 5』に見える斜寧何魯不の子の「字」は「令田当」だが、『撒 11』は「<sup>ㄊ</sup>当」と作る。従って、「<sup>ㄊ</sup>当＝令田当、<sup>ㄊ</sup>＝令田」となることがわかる。」（141 頁）とある。なお、『撻』は故耶律氏銘石、『撒』は耶律迪烈墓誌。数字は行数。

<sup>16</sup> 清格爾泰(2010)『清格爾泰文集 第 5 卷』赤峰：內蒙古出版集團・內蒙古科學技術出版社、534-535 頁。

<sup>17</sup> 劉鳳翥(2010)「契丹小字《耶律宗教墓誌銘》考釋」『文史』

吉池：当面の問題は入声韻尾の有無の解明なので、4つの可能性がある则认为たうえで、仮に𐰃 dir として議論を進めてもいいのではないのでしょうか。

中村：問題は、迪烈は dir を音訳したものか、それとも dirəd を音訳したものかということです。

### 迪烈は dir か dirəd か

吉池：烏拉熙春(2006)は、𐰃令 (拓本によると𐰃令。対談者注記) dirəd の d は部族名に付す複数語尾で、部族名を個人の名としたものであるが、漢字音訳語の敵烈や迪烈には語尾 d は表現されていないとします。『遼史』に見える「敵烈德」「迪烈得」「迪烈德」「迭烈德」などの徳や得が、複数語尾 d を表現したものであるとします<sup>18</sup>。

中村：拉熙春(2006)は、民族名を人の名前に用いた場合、複数語尾 d を表記するものと表記しないものがあるとするわけですね。迪烈や敵烈は表記しない音訳で、敵烈徳・迪烈得・迪烈徳・迭烈徳は表記する音訳。呉英喆(2007)は、迪烈は𐰃田𐰃および𐰃令を音訳したもので、迪烈の入声韻尾-t で𐰃を表記したと考えるから、両者は意見を異にします。

吉池：私は烏拉熙春(2006)に理が有ると考えます。

中村：根拠は何でしょう。

吉池：迪烈を、語末子音 d の無い形式で表記する墓誌が2つあります<sup>19</sup>。

### その1—迪烈𐰃田𐰃 dire

吉池：耶律(韓)迪烈墓誌の当該部分を、劉鳳翥(2014)の模写を作業用フォントに翻字し傍訳とともに示すと次のとおりです。

耶律(韓)迪烈墓誌

---

<sup>18</sup> 「𐰃令」\* dirəd の漢文訳音は誌蓋の「迪烈」と『遼史』耶律敵烈傳の「敵烈」に見え、両者にはいずれも契丹語語尾の d 子音が表現されていない。この名は遼の北邊の部族名 dirəd と同一の単語で、語尾の d 子音は漢文訳音では有ったり無かったりする。この部族名を『遼史』の訳音は「敵烈」「敵烈徳」「迪烈得」「迪烈徳」「迭烈徳」に作り、『金史』の訳音は「迪烈」「迪烈底」に作る。畢沅『続資治通鑑』の訳音は「迪里」に作る。」(140-141頁)。

<sup>19</sup> 以下にとり上げる空寧迪烈と時時里迪烈の二例に対応する契丹小字文の語末に d が付かないことについては愛新覺羅 烏拉熙春(2012)『新出契丹史料の研究』京都：松香堂書店 102頁で言及されている。

第1行目：・・・凡太伏-令田券-丞丹和-公存矢-並凡当

空寧 迪烈 太保之 墓於 誌

【空寧（第二の名、字）・迪烈（幼名）太保（職名）の墓に誌す】

吉池：墓主の耶律（韓）迪烈には先に亡くなった妻がいました。亡き妻の漢文による「耶律（韓）迪烈妻蕭烏盧本娘子墓誌」が、韓氏の墓群から出土しています。漢文墓誌には「娘子蕭氏烏盧本」と名前があります。夫の「耶律（韓）迪烈墓誌」中に「烏盧本娘子の墓の」（23行目）と読める箇所があるので、耶律（韓）迪烈と烏盧本娘子が夫婦であったことは間違いないでしょう。それを前提として、亡き妻の漢文墓誌に「耶律迪烈太保妻娘子蕭氏墓誌銘」（耶律迪烈太保の妻蕭氏の墓誌銘）とあるので、夫の名が遼代に迪烈という表記であったことは明らかです。なお空寧は漢文墓誌にも史書にもないもので現代の当て字です。迪烈に相当する令田券の券は「越」の漢字音 iue の表記に 𐰇券 (ue-e) のように使用されるものですから、令田券は dire であり d に相当する音は含みません。

中村：そうすると、迪烈は dire の表記を意図したもので、この迪烈を利用して dirəd（複数語尾 d がある）も表記するが漢字音訳に d の表記は意図されていない。もしも d の表記を意図する場合は迪烈徳のように d に相当する漢字を付す、ということですね。このような例は二つあるとのことですが、もう一つの例をお願いします。

## その2—迪烈令田券 dire

吉池：宗魏國妃蕭氏墓誌があります。契丹小字文と漢文の両者が出土しています。劉鳳翥(2014)の模写を作業用フォントに翻字し傍訳とともに示すと次のとおりです。

宗魏國妃蕭氏墓誌

第4行目：・・・𐰇-𐰇𐰇𐰇𐰇-令田券

父 時時里 迪烈

【父の時時里・迪烈】

吉池：漢文の宗魏國妃蕭氏墓誌には「父の名は時時里で、幼名は迪烈」（「父名時時里，小名迪烈，）とあるので、令田券の訳名が迪烈であることは間違いありません。令が d [t] であることは漢字音との対応により『契丹小字研究』（1985）以来認められているので、令田券は dire となります。

## 烈を利用した理由

中村：迪烈という音訳が入声韻尾の利用を意図していないとしたら、dire の音訳になぜ烈という旧入声字を利用したかということが問題になります。

吉池：烏拉熙春(2006)によると畢沅『続資治通鑑』では迪烈の訳音を「迪里」に作るということです。そうすると「里」li でも良いのではないかという話ですね。

中村：烈でなければならない理由があったはずですが、音と意味の両者によるのでしょうか。音の点からみれば母音の音価を利用するためです。dire の re ([re] もしくは [rɛ]) という音を漢字音で表記する場合、漢語に r の声母は無いので、来母 l-を利用するしかありません。当時の漢語に l+e を持つ音節を探すと、旧入声字「列烈裂冽獵鬣」lie もしくは「劣」liue しかありません<sup>20</sup>。このなかで人名の表記として最適な意味を持つ字は「烈」ということになります。これは dire と迪烈の対応についての説明を試みたものです。dirəd と迪烈の対応については別の説明が必要です。いずれにしても、迪烈に dire と dirəd の両者が対応するからには、烈に-t 韻尾があったと即断するわけにはいきません。

吉池：dirəd と迪烈の対応の説明は困難ですね。迪烈という訳語の初出が何時かという問題と関係します。遼(契丹)の成立は907年なので北宋の前です。その前後に烈 l-t であり dirəd の訳語として迪烈が作られたが、遼(契丹)の漢児言語および旧音を保持した契丹漢字音ではすでに入声韻尾 t は無かったので、dire に迪烈を対応させることが行われたということであるかもしれません。

中村：また、音訳はその性質上、原語に対して近似音を付すことになります。近似音を利用した議論によって烈に-t 韻尾を認めるためには、個別の対応を出すだけでは足りません。音訳の-t と原語の-d との対応が、迪烈と dirəd 以外にも数多く確認できるという“対応の傾向”を提示する必要があります。いずれにしても、遼代の漢児言語もしくは旧音を保持した契丹漢字音として、烈に-t 韻尾があったと判断するためには、根拠となる資料と議論が不足しているように思われます。

### 耶律の律の韻尾

吉池：吳英喆(2007)は、高路加(1988)<sup>21</sup>の説“**𡗗𡗗𡗗**の読音は yi-la-u-t で意味は勝利であり、漢訳の耶律に対応する。**𡗗 t** は、律の入声韻尾 t によって表記されている”を紹介し、自らも律に-t 韻尾を認めます。

契丹小字中 **𡗗𡗗𡗗** 表示“耶律”，前人已釋出。高路加先生根據契丹姓氏耶律的不同的漢譯並且依據這些漢譯的中古音以及這一名稱的來源等情況，說明 **𡗗𡗗𡗗** 的讀音應為 yi-la-u-t,

<sup>20</sup> 楊耐思(1981)『中原音韻音系』北京：中國社會科學出版社による。

<sup>21</sup> 高路加(1988)「契丹姓氏耶律音義新探」『內蒙古大學學報(哲學社會科學版)』1988年第4期、70-77頁。



意義爲“勝利”。“火”是契丹小字中的一種複數附加成分，其音值爲 [t]。<sup>⑨</sup>高文的結論在後來的研究中得到了印證。如 **𐰺𐰽𐰺𐰾** 表示“崇古德”，**𐰺𐰾 𐰺𐰽** 表示“東京” [toru kiŋ]。其中 **𐰺𐰾** 的第一原字 **𐰺** 可能是 **火** 的異體。**𐰺𐰽𐰺𐰾** 的讀音 yi-la-u-t 的收尾輔音 -t，恰好與“律”之中古音入聲韻尾相合。如“律”的上古音：liǿwt<sub>4</sub>，中古音：liüət<sub>4</sub>，近代音：liu<sub>4</sub>。**𐰺𐰽𐰺𐰾** 的收尾輔音 -t，不與“律”的近代音 liu<sub>4</sub> 對應。說明契丹語 **𐰺𐰽𐰺𐰾** 中保留着漢語入聲韻尾，收尾原字 **火** 即表示入聲韻尾 -t。 (27 頁)

⑨高路加《契丹姓氏耶律音義新探》，《內蒙古大學學報》1988 年第 4 期。

\* 対談者注：「“東京” [toru kiŋ]」の toru は東に相当する契丹語。

中村：議論に入る前に、やや本筋から離れますが、引用文中の「上古音：liǿwt<sub>4</sub>，中古音：liüət<sub>4</sub>」の「iǿ」という表記が少し気になりました。どなたの再構音を利用したかわからないので誤植だと断定はできないのですが通常表記とは異なります。さて吳英喆(2007)は、**𐰺𐰽𐰺𐰾** を耶律とし、それを yi-la-u-t と読むのですが、その根拠は何でしょう。

### 𐰺𐰽𐰺𐰾 と耶律の対応

吉池：**𐰺𐰽𐰺𐰾** が耶律に相当することについて、『契丹小字研究』(1985)によると、早くは王靜如(1933)<sup>22</sup> が指摘しました<sup>23</sup>。道宗哀冊の契丹文の 2 行目と漢文の 2 行目の最後の表記を対応させて推測したものです。**𐰺𐰽𐰺𐰾** 全体ではなく **𐰺𐰽** のみに耶律を当てます<sup>24</sup>。契丹文と漢文が次のように対応します。

契丹文第 2 行目：・ ・ ・ ・ ・	<b>𐰺𐰽</b> - <b>𐰺</b>	<b>𐰺𐰽𐰺𐰾</b>	<b>𐰺𐰽𐰾</b>	/ 【改行】	<b>𐰺𐰽</b> - <b>𐰺𐰽</b> - <b>𐰺𐰽</b> - <b>𐰺𐰽</b>
	臣	耶律某某	撰		
漢文第 2 行目	：・ ・ ・ ・ ・ 臣耶律 儼 撰				

『契丹小字研究』(1985)はこの契丹文を次のように読みます。

契丹文第 2 行目：・ ・ ・ ・ ・	<b>𐰺𐰽</b> - <b>𐰺</b>	<b>𐰺𐰽𐰺𐰾</b>	<b>𐰺𐰽𐰾</b>	/ 【改行】	<b>𐰺𐰽</b> - <b>𐰺𐰽</b> - <b>𐰺𐰽</b> - <b>𐰺𐰽</b>
	臣	耶律	固		勅 奉 撰

<sup>22</sup> 王靜如(1933)「遼道宗及宣懿皇后契丹國字哀冊初釋」『國立中央研究院歷史語言研究所集刊』第三本第四分。陳乃雄・包聯群(2001)『契丹小字研究論文選編』呼和浩特：內蒙古人民出版社所収、58-73 頁。

<sup>23</sup> 「早在四十多年前，王靜如先生曾懷疑過「**𐰺𐰽𐰺𐰾**」是否可能是「耶律」之意」(111 頁)

<sup>24</sup> 「此外契丹字尚有數詞應釋者，茲陳述如下：“**𐰺𐰽 𐰺**”二字（冊中第二行）其意當譯漢字之“臣”。契丹語作“押番”，通古斯語爲 amban 音節似亦近者。**𐰺𐰽𐰺𐰾** 當爲耶律某某，上小二字爲耶律，下二字蓋其名號。更下“**𐰺𐰽𐰾**”字，當爲撰字，此俱以格式列成，故易識之也。」(65 頁)。

中村：王靜如(1933)は、小さな字と字の開け方によって、「𠂔𠂔-𠂔 𠂔𠂔𠂔𠂔 𠂔𠂔𠂔」と「臣耶律 儼 撰」を対応させ、𠂔𠂔に耶律をあて、𠂔𠂔の部分は名として某某（契丹文）としたということですね。王氏の立場からすると、𠂔𠂔𠂔𠂔の𠂔𠂔は耶律で、𠂔𠂔は儼ではないのですか。

吉池：なぜ𠂔𠂔を儼とせず、某某としたか分かりませんが、推測するに、儼を漢語名とし、その契丹語表記を𠂔𠂔と見たのかもしれませんが。もっとも、契丹文と漢文の撰者は異なりますので、漢文の耶律儼を𠂔𠂔𠂔𠂔に当てて耶律某某するのは問題です。

中村：どういうことでしょうか。

吉池：道宗哀册と同時に出土した宣懿（道宗の皇后）哀册をみると、契丹文の撰者は𠂔𠂔𠂔𠂔-𠂔𠂔𠂔𠂔（耶律固）で漢文の撰者は張琳です。契丹文と漢文の撰者は異なります。道宗哀册の契丹文の撰者は𠂔𠂔𠂔𠂔-𠂔𠂔𠂔𠂔（耶律固）で漢文の撰者は耶律儼です。現在の解読成果から見れば、𠂔𠂔𠂔𠂔-𠂔𠂔𠂔𠂔（耶律固）と耶律儼が別人であることは両者の役職名が異なることからわかります。

中村：そうする、偶然に良い結果がもたらされたということになりますね。

吉池：そういうことになります。もっとも『契丹小字研究』（1985）は、王靜如(1933)を参考にしつつ、𠂔𠂔𠂔𠂔の読み方により耶律とし、耶律とした場合にうまく説明できる資料を示します。『契丹小字研究』（1985）は𠂔𠂔𠂔𠂔を i. li. u. uŋ → iliūŋ と読み耶律としました。𠂔 i と𠂔 u は借用漢語の表記からの結論です。𠂔 uŋ は、点のある𠂔（借用漢語の表記より uŋ）からの類推です。𠂔 li は音訳漢字の律によるものです。このように読むと、故耶律氏銘石の漢字誌蓋と契丹文が説明できます。故耶律氏銘石の漢字誌蓋には「耶律氏銘石」とあります。契丹文の初頭には𠂔𠂔-𠂔𠂔𠂔𠂔𠂔とあり、3行目の墓主について書いてあると思われる箇所には𠂔𠂔𠂔𠂔とあります。𠂔𠂔-𠂔𠂔𠂔𠂔𠂔を大耶律と読み<sup>25</sup>、𠂔𠂔𠂔𠂔を耶律と読むことができるというわけです。

中村：𠂔𠂔𠂔𠂔と耶律の対応は、スタート時点では心もとないところがありますが、結果としては納得できます。𠂔𠂔𠂔𠂔の読みの経緯はどうでしょう。

---

<sup>25</sup> 「「𠂔𠂔-𠂔𠂔𠂔𠂔𠂔」就爲「大耶律」（「𠂔𠂔」義「大」屬已知。）」111頁。なお、𠂔𠂔𠂔𠂔𠂔と𠂔𠂔𠂔𠂔の違いについては、蘇赫(1981)「契丹文及其文獻」『中國史研究動態』1981(5)（陳乃雄・包聯群編(2005)『契丹小字研究論文選編』呼和浩特：內蒙古人民出版社、335-341頁所収）に次のようにある。𠂔𠂔𠂔𠂔は一般の姓氏で、𠂔𠂔𠂔𠂔𠂔は一般の姓氏を越えた大きな単位を示すのではないかとする。

### 𠂔𠂔𠂔火の読み

吉池：𠂔𠂔𠂔火の読みについては、高路加(1988)の yi-la-u-t (原文では yila'ut) よりも二年ほど早く、王弘力(1986) は j-li-u-t と読み、li-u-t は律 leut に近いとします。慎重な言い方ですが、律に入声韻尾-t を認めたと見なすことができます。火を t とするのは、律の入声韻尾-t 及び『金史』百官志の移刺答 (耶律の音訳の一つ) の答 [t-] によったのでしょう<sup>26</sup>。高路加(1988)は、𠂔が母音 a を含む単語の中で使用されることより母音調和の観点から𠂔 la とし、火を部族名に付す複数語尾-t/-ut とみて、𠂔𠂔𠂔火を yila'ut とします<sup>27</sup>。

中村：律 leut の e は不可解な表記ですがそれは措くとして、火が d を含むことを示す直接の証拠はないのでしょうか。

吉池：呉英喆(2007)は、契丹小字文と漢文が揃って出土している耶律宗教墓誌を挙げます。墓主の長男の名 𠂔𠂔火に、漢文の崇古德 (碑文は崇骨徳とする。：対談者注記) にあたることより、火を徳に対応させ t とします。これは火を t とする直接の根拠でしょう。もっとも 𠂔𠂔火ですが、𠂔𠂔は崇 ʃʰuŋ に相当します。そこで火を d/ud とすると、「骨」に対応する原字がないこととなります。即實(2012)<sup>28</sup> は火を [xot] として解決を図りますがどうでしょうか。あるいは ʃʰuŋ+ud という音連続において発音を容易にするため g を添加して実際には ʃʰuŋgud のように発音し、gu に骨を当てたのかもしれないとも想像しています。

中村：あるいは契丹語 ʃʰuŋud を漢人が聞いた場合、ʃʰuŋgud ないし ʃʰuŋkut のように聞こえたということはあるかも知れません。

吉池：いずれにしても火が子音 d を含むことについて不利な材料は今のところ見当たりま

<sup>26</sup> 「旧傳耶律倣漢高劉姓，石抹倣丞相蕭姓，不免附會。耶律當從“迭刺部霞賴蓋鄉耶律彌里”而來。𠂔𠂔𠂔火 j-li-u-t，首音節讀 ji 或 je，後音節似“劉”，但更接近入聲“律 leut”。遼與元皆譯“耶律”，惟女真譯爲“移刺”。元姚燧《牧菴文集》卷八《承顏亭記》曰：“由金人惡耶律爲字有父嫌，訛爲移喇。”當時稱父爲耶(爺)者乃是漢人，女真人何以惡之？頗疑女真人僅呼其詞根 jil 而略其後；阿拉伯史籍中用 era，亦 ila 之音變。《金史》之《百官志》中尚保留“移刺答”，證明原來讀音有-t 尾。與此相似，蕭姓“審密” ʃəmi，元譯“石米”亦同，惟女真譯“石抹” ʃəm，亦略去其尾音。」(63 頁)。

<sup>27</sup> 「如果以上論斷不誤，那麼，𠂔𠂔𠂔火的讀音就應該是 yila'ut。既然“𠂔”音 [i]，“𠂔”音 [u]，“𠂔”就應和 la 相對應，音爲 [la]。清、劉等同志曾把“𠂔”的音值擬爲 [li]，我認爲應加以修正。還有一個理由：蒙古語族語言均具有元音和諧現象，據清、劉等同志研究，契丹小字中確實反映出了這種現象。而原字“𠂔”經常和 [a] 類元音共同組合成字，例如：𠂔𠂔列 [ʔ-l-ya] (仲 13、1)，𠂔𠂔𠂔𠂔 [b-ʔ-a-an] (仲 19、19)，𠂔𠂔𠂔𠂔 [im-ʔ-ya-ʔ] (令 10)，𠂔𠂔𠂔𠂔 [ʔ-ʔ-ya-a-ʔ] (興 8) 等等，我認爲這也表明“𠂔”應含有後元音。故擬爲 [la] 是合適的。」(79 頁)。

<sup>28</sup> 即實(2012)『謎田耕耘 契丹小字解讀續』瀋陽：遼寧民族出版社、6 頁。

せん。

中村：高路加(1988)は yila'ut としますが、音節末子音を d とみて、仮に yila'ud であるとし  
ましよう。問題は音訳語の耶律の律に、“遼代の契丹漢字音”として入声韻尾 t が有ったか  
否かということです。

吉池：呉英喆(2007)は王弘力(1986)や高路加(1988)を利用して“遼代の漢字音”に入声韻尾 t  
を想定しますが、王弘力(1986)や高路加(1988)は、漢字訳語の耶律の律と原語の d が対応し  
ていることにより律に入声韻尾 t を想定できるとは言いますが、“遼代の漢字音”に入声韻  
尾 t が有ったというようなことは一言もいいません。高路加(1988)の一部を引用すると次の  
とおりです。

由於契丹耶律氏出現可追溯到唐代，所以可以推測這個姓氏較早的漢字譯名耶律（《通鑑考  
異》引《唐余錄》等）、耶律（《新唐書·北狄傳》）在唐代就已產生了。後來，在金元時期，  
又產生了一系列異譯。在漢語語音史上，唐宋時期屬“中古音時期”，而金元時期則是但處於  
向“近古音時期”過渡的階段。這樣，就有必要查明這個姓氏的各種譯名用字的中古、近古讀  
音究竟如何。（76 頁）

在金元時期，雖然一方面許多文人仍沿用唐人古譯或按唐代慣例根據《切韻》、《廣韻》一類代  
表中古音的韻書來選擇譯音用字，但另一方面，人民中間也有一些人逐漸轉變為按照自己的口  
語語音來採用譯音用字，所以金元以後的著作中，反映出人們選擇譯音用字一般不考慮入聲字  
與非入聲字的差別。如《元朝秘史》就是一個典型例子。於是，就出現了耶律、移刺、迭刺、  
迭烈～移刺答、移刺都、耶羅多，蒲刺～蒲刺都、蒲刺睹、蒲刺篤，敵烈～敵烈得、迪烈土、  
克烈～客列亦惕，廣吉刺、弘吉刺～瓮吉刺帶、瓮吉刺惕、瓮吉刺特，斡亦刺、猥刺、外刺、  
瓦刺～斡亦刺惕、外族臺、外刺歹、厄魯特、衛拉特這各組譯名先後出現甚至在一個階段內併  
存的現象。越是到近代，越是接近口語的作品，和上列各組右側譯名相類的譯法就越多。這種  
譯法歧異的現象，正是金元時期漢語語音發生急劇變化這種歷史狀況的反映。以上這些，說明  
契丹語耶律的收音音應該是-t。（78 頁）

中村：**万斤及火**の**火**が部族名を表わす複数語尾の t であることを明らかにするために、唐代  
の旧譯と見なされる耶律の律の音を利用したということですね。それを前提として、遼代の  
漢字言語もしくは旧音を保持した契丹漢字音に入声韻尾 t が認められるか否か検討しまし  
ょう。

**耶律は語末の d を表記しているか**

吉池：『遼史』卷1「太祖上」に「太祖大聖大明神烈天皇帝，姓耶律氏，諱億，字阿保機，小

字啜里只，契丹 迭刺部 霞瀨益石烈郷 耶律彌里人。」とあります。校勘記に、石烈は国語解で郷、彌里は国語解で郷の小さなものとあり、「石烈郷」の郷は衍字とあります。白鳥庫吉(1910-1913 ; 1970)<sup>29</sup> は、耶律彌里は耶律村という地名であり、耶律は居住の地名をとって姓とした、とします。村名であった時点では、部族名に付す複数語尾 *d* は無かったはずで

中村：問題は村名のときに耶律という訳名があったかどうかということですね。村名に耶律という漢訳はなかったが、後代に『遼史』などの史書を編纂するときに耶律彌里と書いたということでしょう。

吉池：村名であった時に耶律という訳名があっか否か、それを知る手がかりはありませんが、訳名があった可能性は低いようにおもいます。なお、耶律という訳名をどこまで遡れるかということですが、最も早い漢語碑文としては会同四年(941年)の耶律羽之墓誌があり「公諱羽之，姓耶律氏」とあります<sup>30</sup>。これは遼の太祖(耶律阿保機)の即位年(907年)から34年後のもので、北宋の建国(960年)以前です。仮にこの時代の耶律の律に入声韻尾 *t* があり、契丹語名の語末の *d* を反映していたとして、そのような北宋以前の漢語をどのように見るか、難しいですね。

中村：現存する最も早い契丹小字資料は重熙22年(1053年)の耶律宗教墓誌です。会同四年(941年)の碑文の耶律という訳語は、契丹小字資料からみて百年以上前のものです。耶律という訳名は遼(契丹)の太祖およびそれに連なる王朝の人々の名に使用されるもので極めて重要な名ですから、900年前後の漢訳の耶律と原語との表記は遼代を通して維持されるでしょう。そうすると、仮に遼代の“漢児言語”の律に入声韻尾 *t* は無いとしても、*yila'ud* に耶律を当てる習慣は維持されるので、入声韻尾 *t* が無かったことを証明するのは困難です。

吉池：迪烈という訳語のばあい、原語の表記に𐰃𐰺 *dirəd*、𐰃𐰺𐰩 *dire*、𐰃𐰺𐰩 *dire* がありました。これより複数語尾 *d* を用いなくともよいということがわかり、これによると迪烈の烈に、必ずしも入声韻尾 *t* を想定しなくてもよいということになります。問題は耶律という訳語と、原語表記の𐰃𐰺𐰩𐰺 *yila'ud* の場合はどうかということですね。耶律の場合、ほぼすべて<sup>31</sup>

<sup>29</sup> 白鳥庫吉(1910-1913; 1970)「東胡民族考」『史學雜誌』21編～24編。(1970)『白鳥庫吉全集 第四卷』岩波書店、63-320頁による。

<sup>30</sup> 蓋之庸(2002)『内蒙古遼代石刻文研究』呼和浩特：内蒙古大学出版社。なお会同五年の墓誌が耶律の初見であることは、烏拉熙春(2012)(cf.注19)の51頁にある。

<sup>31</sup> “ほぼ”としたのは、烏拉熙春(2012)(cf.注19)48頁は、耶律として𐰃𐰺𐰩𐰺・𐰃𐰺𐰩𐰺・𐰃𐰺𐰩𐰺の三種を挙げるが、残念ながらどの資料にもとづく記述であるか分からないためである。なお、𐰃𐰺𐰩𐰺の𐰺はふつう *ul* とされる。

複数語尾 d/ud が付いています。

中村：耶律と𐰽𐰺𐰸𐰾火は、おそらく 900 年前後に訳語と原語として固定され、変更されることなく王朝を通して使用されたでしょうから、このような資料を音韻史に利用することについては慎重でなければなりません。訳語ができた 900 年前後の事情（入声韻尾 t を想定して良いかもしれないが漢語の質はどのようなものであるか議論が必要です）と、遼代の漢児言語および旧音を保持した契丹漢字音でどのような音であったかを明らかにすることができない限り、耶律に入声韻尾 t を認めることは控えた方がいいでしょう。なお、高路加(1988)は yila'ut (耶律) とし la'ut に律にあてるわけですが、律を中古音としてみても近世音としてみても母音 a とは合わず、たとえ近似音であるとしても気になることです。

吉池：高路加(1988)は、𐰽が母音 a を含む単語の中で使用されることより母音調和の観点から𐰽を la とし𐰽𐰺𐰸𐰾火 (耶律) を yila'ut としたわけですが、たしかに律の中古音や近世音とは母音が合いません。この点について Shimunek(2017)<sup>32</sup> は耶律に相当する契丹文字𐰽𐰺𐰸𐰾火を y.ar.u<sup>w</sup>.ud→yarud とします。ラシード・アッディーンのパルシア語『集史』に “In the Chinese language the people of [Qara] khitai are called Chīdan Yār” (英訳) とある Chīdan [چیدن] を契丹、Yār [يار] を耶律と解釈し、yarud (yar 耶律+ud 複数語尾) と読みます<sup>33</sup>。Yār を耶律と読むのは新説のようです。もっとも Yār を耶律と読むことについて論証はないので、そのまま採用するわけにはいきませんが。

中村：おもしろい指摘です。『集史』の Yār が耶律に相当するかどうかはともかくとして、高路加(1988)は母音調和の観点から𐰽を la としますが理屈の上では al でも ar も良いわけで

<sup>32</sup> Shimunek, A. (2017) *Languages of Ancient Southern Mongolia and North China: A Historical-comparative Study of the Serbi or Xianbei Branch of the Serbi-mongolic Language Family, With an Analysis of Northeastern Frontier Chinese (Tunguso-Sibirica)*, Wiesbaden : Harrassowitz Verlag.

<sup>33</sup>以下は Shimunek(2017)の本文に引用された『集史』(パルシア語) 当該部分の英訳部分、及びそれに付された注記。“...Another frontier is with the territory and plain of the Qara Khitai. Those tribes are all nomads. They are adjacent to the Mongol nomads, and their language, physiognomy, and customs exceedingly resemble them. In the Chinese language the people of [Qara] Khitai are called Chīdan Yār” (*JT<sub>Th</sub>* 441-442; my revision of Thackston’s translation).<sup>147</sup>

<sup>147</sup>Thackston considers this “Chīdan” [چیدن] to be a transcription of Chinese Ch’i-tan 契丹 and states that “the yār part has not been explained” (2012:151 n. 6). This Yār [يار] is in fact the attested imperial clan name of the Kitans, transcribed in Old Mandarin as Yeh-lü [耶律] and in Kitan Assembled Script in the plural form \*yar-ud 𐰽𐰺𐰸𐰾火 <y.ar.u<sup>w</sup>.ud>(e.g. *YTi*2:16).

(67 頁)

さらに以下の記述もある。

“... a variant of the Kitan imperial clan name attested in Kitan Assembled Script as \*yar-ud 𐰽𐰺𐰸𐰾火 <y.ar.u<sup>w</sup>.ud>(YTi2:16), composed of \*yar ‘Kitan clan name’(耶律) + \*-ud ‘plural suffix’. The clan name is also transcribed in Persian as Yār [يار] (*JT<sub>RM</sub>* 442). . . .” (198 頁)

す。𠂔𠂔𠂔𠂔（耶律）を *yarud* もしくは *yalud* とするならば、律は *rud*/*lud* に相当することになるので、律の母音との対応の不具合は解消します。もっとも、*Yār* を耶律と読むことのみならず、*Chīdan* を契丹の漢字音とすることについても、牙喉音の舌面音化に関わるので十分な検討が必要です。

吉池：いずれにしても、契丹漢字音として迪烈の烈や耶律の律に入声韻尾 *t* を認めることについて完全に否定するわけではないが、現在我々が持っている資料の範囲内では、韻尾 *t* を認めることは控えたほうがよいということですね。以前の対談で、*t* 韻尾をもつ旧入声字のうちの一部の字に、旧音を保持した契丹漢字音として *-r* や *-l* を認めました。*-r* や *-l* 以外に *-t* 韻尾を認めるとなると複雑な話になるのですが、今回の議論によると *t* 韻尾を認める必要は無いということになります。これで呉英喆(2007)の途中まで検討しました。入声韻尾 *k* の検討が残ってしまいましたが、呉英喆(2011)とともに、次回にまわしましょう。